

福岡市の中心地、天神駅から

地下鉄箱崎線で約10分、博

多駅からJR鹿児島本

線に乗って約5分とい

う交通至便な地に位

置するまち、箱崎。

約1000年前から

は日本三大八幡宮で

ある宮崎宮や箱崎宿

で名を馳せ、1000

前からは九州大学のメ

インキャンパスを擁する

地として栄えた、歴史と文

化のあるまちだ。大きな変化が訪

れたのは、2018年。シンボルの

存在だった九州大学が移転し、日本

国内の都市部では最後ともいわれ

る、周辺を含めて約50ヘクタールも

の開発用地が誕生したのだ。そして、

現在、その地で新しいまちを作る壮

大なプロジェクトが進行中だ。その

背景と、まちの未来像を取材した。

○土地の潜在能力を引き出す

新たなまち誕生の端緒は、平成初

期。九州大学がキャンパスの分散・

老朽化解消のため、福岡県伊都地区

volume 160

変わる 日本の 「暮らし」と 「まち」



阿部民子 text by Tamiko Abe

Illustration by Shigeyuki Sakata

にキャンパスの移転統合を決めた
ことから始まった。なかでも福岡市
中心部に近い箱崎キャンパスの広大
な跡地利用は、福岡市の未来をも占
う大きな課題となった。そこで、福
岡市と九州大学は、URも検討委員
として参画する中で協力して、まち
の基本的なコンセプトである「箱崎
キャンパス跡地グランドデザイン」
を策定。同時に、少子高齢化の課題
などを解決しながら、最先端の技術
革新を導入するスマートシティのモ
デル都市として「FUKUOKA Smart
EAST」を構想。箱崎を拠点に、福
岡市、さらには世界へと広がる新た

なまちづくりへの歩みが始まった。
計画では、国の登録有形文化財で
ある九州大学旧工学部本館等を箱崎
サテライトとして残し、北エリアの
約20ヘクタールと南エリアの約30ヘ
クタールに2分割して整備。学校や
公園などがある北エリアは福岡市が
土地区画整理事業を行い、九州大学
の跡地である南エリアの整備はUR
都市機構が担うこととなった。
「URは九州大学六本松キャンパス
跡地整備に携わった経験を活かし、
南エリアの土地の一部を九州大学と
共有。手を携えて新たなまちづくり
に挑むことになりました」と話すの
は、UR九州支社の久保明彦だ。
「まず我々が行ったのは、まちの骨
格となる道路やインフラの整備で
す。2路線約1.4kmの都市計画道
路を新たに整備し、約2kmにわたる
外周道路では歩道の整備に加え幅員
も広げることで交通渋滞の解消や地
域交通の利便性を向上させました。
公共下水道の整備に関しては、海に
近いため雨水の排水が難しく、さら
に地下鉄が走っている困難な条件の
もと、シールドマシンで地下約20m

に排水用のトンネルを掘るなど
の工夫を凝らしました。地下鉄
の駅出入口も新設するなど、既
成市街地で複数の工事が同時進
行する中、計画から工事完了ま
で一括して担い、土地のポテン
シャルを高めるよう努めました」
さらに、URは九州大学とと
もに、跡地の一体的・長期的な

土地利用に必要な開発条件を検討。
グランドデザインや福岡市のスマー
トシティ構想に沿って開発を行う、
土地利用事業者の公募を行った。全
国から名だたる企業が参加するなか、
今年3月に住友商事を代表者とする
グループに決定。具体的なまちづく
りへと歩みを進めた。

○伝統と革新が融合したまちに

「新しく誕生するまちは、九州大学
や福岡の歴史の継承、みどり創出、
新産業の創造、新しいライフスタイ
ルの創出、環境先進都市の創造な
ど、6つのコンセプトを掲げていま
す。業務・研究機関や商業施設など
の生活支援施設、病院や保育園など
の医療・福祉施設、インターナシヨ
ナルスクールや生涯学習などの教育
施設、さらには共同住宅やサ高住な
どの居住施設、交流・にぎわい施設
などを備え、職住遊が完結できるま
ちになります。また、『歩の軸』と
名付けた緑豊かな歩行者用通路で広
場や公園をつなぎ、緑化率40%を目
指すのも特徴の一つです」と説明す
るのは、住友商事の箱崎プロジェク

ト統括チーム長の中西弘さんだ。
九州大学統合移転推進部統合移転
推進課の今川太一郎課長は「グラン
ドデザインは、地元4つの小学校区
自治協議会の意見を伺いながら作成
しました。それだけに地元の皆さん
の関心も高く、今回の企画提案はグ
ランドデザインに沿っており、理解
を得ていると感じます。今後は、箱
崎サテライトが残りますので、大学
の東の窓口としていろんな方との接
点となる拠点にしたい。そして周辺
のまちに馴染み、皆さんが毎日ワク
ワクできるまちになってほしいです
ね」と期待を寄せる。

まちの整備は段階的に進み、20
28年度後半には第一期まちびら
き、最終的には20
36年度の概成を目
指す。1000年前
から今へ、そして1
00年後も続くまち
へ。URはこれから
も、日本最大級のス
マートシティ実現に
向けて、事業を進め
ていく。

—— 社会課題を、超えていく。 ——



〔企画制作〕新潮社

提供：シンハコザキ100合同会社



広大な九州大学跡地は、これから大きく変わる。
未来にはこのようなスマートシティが誕生する。